
瞳を見れば

にーとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
瞳を見れば

【Nコード】
N4761G

【作者名】
にーとん

【あらすじ】
なぜ俺には読心術なんてものがあるんだろうか。その考えは間違えだったと気づくのに、時間は大してかからなかった。

プロローグ

人の気持ちが分かったら、なんてことを思う人がいるだろう。しかし、人の気持ちが分かったところで良いことはあまり無い。人々の汚れた心を見るだけで自分がうんざりしてくる。

そのせいで俺はずっと、他人とは深く関わらずに生きていた。怖いからだ。その、汚れた心に自分が浸食されていくのが。

言い伝えがある。

この村に伝わる、言い伝え。

『いつか、見たことも聞いたこともない場所から、人間がやってくる』

『その人間を生け贄に捧げればこの村は二度と、食べる物に困らないだろう』

正直、ありえないと思う。

だって、見たことも聞いたこともない場所ってことは要するにこの世界ではないどこから来るってことだ。

異世界から人間がやってくる？そんなのおとぎ話でしかない。

言い伝えがある。

我が家だけに伝わる、その時が来るまで決して他の人に告げてはならない言い伝えが。

『見たことも聞いたこともない場所からやって来たその人間を守るために、うちの家系には二つの能力が授けられていた』

『一つは、相手の瞳を見るだけで心が分かる力』

『もう一つは、言語の違いをも無視して、相手の心に直接語りかける力』

『しかし、いつしかその力は衰え、ほとんどの場合どちらか一方の

力しか使えなくなってしまうた』

しかし、俺には実際に人の心を読む力がある。
そのせいで、何度か苦勞した。人から離れるようになった。

うちの婆ちゃんは二つの能力を使える、きわめて特別な存在であった。

そのために、彼女はいろんなことを知っていた。
あるとき、こんなことを言っていた。

『いいかい。我が家には、人を守る使命がある。だからお前には、その読心術がある』

『その力は、お前を苦しめるかもしれない。ただ、それは同時に人を守る力にもなるんだよ』

『だからね、決して逃げようとしてはいけないよ』
そして、その言葉の真意を今日も考えながら。

プロローグ（後書き）

どうも、初めての方も初めてじゃない方もこんにちは、にーとんとす。

更新は遅いと思いますが、ぜひお楽しみください。

第一話

「そろそろ寝るかな」

そう呟いて、毛布をめくった。

そこには、見たこともない少女が、かわいらしい寝顔で寝ていた。その少女の光沢のある黒い髪は彼女が息をするたびに少しだけ動いて――って、うおおおおおおおおああああ！！！！！！

誰だ！！誰なんだよこいつ！！

何勝手に人のベッドで寝てんの！？

てかなんで俺は割合細かい描写をしてたの？びっくりするまで時間かかり過ぎだよ？

「ちょ、母さん！！母さん！！」

急いで助けを求める。

こら、へたれとか言うな。

しょうがねえだろうが。

「何よ、騒がしいわね」

「騒がしいどころじゃないって！俺のベッドに寝てる女の子がいんだよ！！」

頬を染める母さん。

いや、違いますよ！勘違いしないで！！

ていうか目を見るだけで分かるんだけどね！？考えてること！

「まあまあ、私は別に止めないから…」

だからちっがああああうううううううううううう！！！！！！

「ちっげえよ！見たこともないんだって！！」

「じゃあ、酔っぱらって記憶が…」

「酒なんて飲んでない！！てか今まで一緒にいただろうが！！」

なんかもう、すごいパニックですね。

すると母さんは部屋のドアに向かって

…ってそれはまずいって！父—

「ちよつと、お父さ〜ん！！」

—父さんはまずいってええええええええええ！！

「どうしたんだ、騒がしい」

「ちよつと来て〜」

母さんが答える。

「ちよつと待ってろ…」

いや、だから父さんは変な勘違いするから駄目だって！！

しかし無慈悲にも俺の部屋のドアがガラガラつと音を立てて開いた。

……はあ、こりゃ家族会議だな。

そして母さんの顔をこんにゃろおとばかり見る。

すると彼女の目から俺の目に、そして俺の脳に情報が流れ込んでくる。

え？ いや、ちょっと？ その言い方はまず――

「レナのベッドに女の子が寝てたの。」

――まずいってば――！

いつもなら『レナって女っぽいからやめろよ、レナードだよレナード！』と言っているところだが今回は違う突っ込みをしなくてはならなかった。

「違う――！ 知、ら、な、い、女の子――！」

「お前、酔っぱらってたんじゃ……：しかしいくらなんでも部屋に連れ込むとは……」

「違うっつうの！」

「おーい、お袋お――！」

婆ちゃん呼ぶのそこで――！？

てか本気で家族会議っぽくなってるし！

「どうしたんだい、騒がしい」

なんでうちの家族は全員最初に『騒がしい』って言うの？

俺のせいだろうけどさ――！

しかしベッドに横たわっているその少女を見て婆ちゃんは、妙に混乱している俺にこう告げたのだ。

「この娘は、言い伝えの・・・」

「え？」

「見たことも、聞いたこともない、場所からやってくる・・・」

いやいや、それはないだろ。

せいぜい不法侵入とかーと、そこで気づくのだ。
不法侵入者がベッドで寝てるわけがない。

いや、当たり前だけど。

「じゃあ、その子には言葉も通じないのか？」

俺が聞くと、婆ちゃんは答えた。

「ああ。だが、それをなんとかするのが私たちの役目なんだよ」

そんな感じで、物語は俺の部屋、詳しく言えば俺のベッドの周辺で始まったのである。

第一話（後書き）

どうも、にーとんです。

結構ハチャメチャに進んでいきます。

今まで試行錯誤しながら得た描写方法も今回は使いません！（おい
今後も宜しく！！

第二話

「って…」

なんで俺が床で寝なくちゃなんのだ!!

くそう、今日もベッドの中でぐっすり快眠だったはずなのに…

しかしそんな俺の苦悩も知らず、少女はぐっすりと眠っていた。

単なるおとぎ話でしかないと思っていた少女が自分のベッドで寝ていた。

うーん、どうも信じがたい。

それだったらまだ、俺が酔っぱらって部屋に連れ込んだと考えた方が納得がいくような気がする。

まあ、明日になれば分かることだろ。

そう考えて瞼を閉じた。

その瞼を開けると、もう朝であった。

そして、不運にもちょうどナイスタイミング（この場合バッドタイミングだな）で起きた少女と目が合った。

……やべえ。

少女は固まっている。無理も無いが。

多分今頃、昨日俺がやったように細かい描写をしているところであらう。

『目が覚めると、私のベッドの下に横たわっている、少年がいた。その少年の瞳は見るだけで惹かれてしまいそうで、それはあきらかに一目惚れだった——ってうおおおおお!』

とか心の中でやっているとところだろう。

というかこれはとっとと逃げないとこれはまずいんでなからうか。——しかしここで、前に婆ちゃんの言っていた言葉を思い出す。

『決して逃げようとしてはいけないよ』

そうだ。逃げちゃいけない。俺はこの場で少女の着替えを堪能せねばならないのだ。絶対この状況で着替えるわけがないけど。

というよりもの凄く意味を履き違えてる気がする。

婆ちゃんが言いたかったことは絶対こんなことじゃないと思う。

とか変な現実逃避（になっているのか分からないが）をしていると、少女は叫び声をあげた。

しかも俺にとってその意味は全く理解不能。

やっぱり言い伝えの少女だったのか。

彼女の叫び声に耳をふさいで彼女の目を見る。

彼女の目から心の中の情報が俺の目へ。そして脳へと流れ込む。

『変な人がいる』

…そりゃあないぜ。

俺の能力ではシンプルな情報を読むだけで精一杯だったので本当はきつと

『変な人がいるよ、きゃあああああああああああ！！ママ助けてえ！！』

というのが妥当なところだろう。

見たところ少女は俺より2、3歳下だった。

母親に頼るような年齢じゃないはずなんだがな。まったく、どんな環境で育ったのやら。

さて、とりあえず母さんに助けてもらわねば。

「母さん助けてえ！！」

え？何？人のこと言えないだらって？

馬鹿やろう、緊急事態なんだよ。

「どうしたの騒がしい」

「なんか突然叫び始めてさ」

「そりゃあ、あんたがそんな格好してるから…」

俺は自分の体を見ている。

——はい、パンツ一丁ですね。

しょうがないじゃん！暑かったんだから！！

そう抗議しようとして母さんに向き直る。

すると母さんの目から情報が流れ込んでくる。

いや、それはまずいって！父さんは！！

「お父さーん！」

まずいってば！！

「どうしたんだ、騒がしい」

しかし昨日と同じく無慈悲にも俺の部屋のドアは開いた。

「なんかね、レナがパンツ一丁で女の子を…」

「違う！！かなり違う！！」

もう『レナードだよ！！』とか言ってる余裕は無かった。

第二話（後書き）

プロフィール

（レナード）

この物語の主人公。

読心術を使うことができる。

そのために、人から離れていくことになり、友達はいないが、割合家族と楽しくやっている。

てかこれ需要あるのかな？

まあいいか。

第三話

「でねー、この娘を黙らせてほしいんだってー」

「うむ」

短い返事をするとう父さんは右手をそっと彼女の口に当てた――って違う！

黙らせろってそういう意味じゃない！！

「違うよ父さん！落ち着かせてってこと！！」

「そういうことは早く言えよ」

なんて文句を言いながら父さんは少女の目の前に立った。

しばらくすると、少女は落ち着きを取り戻したようだ。

父さんが俺を呼んだ。

「翻訳を頼むぞ」

「はいはいさー」

俺は少女の目を見た。

少女の目から情報が俺の脳へ流れ込んでくる。

まるで、もとから自分の脳内にあった情報かのように、頭の中に浮かんでくる。

『カエデ』

『ニホン』

『13』

少女から目を離し、父さんは俺に声をかけた。

「レナ、どうだった。」

「ん。順番に、『カエデ』、『ニホン』、『13』」

「なるほど。名前が『カエデ』、出身地が『ニホン』、年齢『13』歳だな。しかし、ニホンと言う場所は聞いたことがない」

じゃあやっぱり言い伝えの女の子だったのか。

それから何分かして、彼女も入れての朝食となった。
彼女はそわそわして、まったく食べ物に口をつけない。

『家に帰りたい』と願っているのが、彼女の目を見ずとも分かる。
そんなカエデをちょっと気にしながら食べすすめていると、婆ちゃん
がしゃべり始めた。

「いいかい。このことを、決して他人に言ってはならないよ」

俺は答えた。

「んなこと分かってるよ。でも、なるべく早く向こうの世界に帰して
やった方が良くないだろうか？」

そう。彼女は何も知らずにここに来てしまったのだ。
言葉が通じない周りの俺らが怖いのは当たり前。
しかも両親は心配しているに決まっている。

「そうだねえ。早いに越したことは無い」

そう婆ちゃんが言うと同時に、情報が俺の脳に流れ込んで来た。
多分、婆ちゃんのテレパシーだろう。

頭の中に、この家と、一つの洞窟が見えた。

そして、そこへ行くまでのいくつものルートが次々と頭の中に流れ込んでくる。

『そこから、その娘を帰すことができる。そしてそれは、お前の役目だ』

最後にそんな言葉が、思い出したかのように頭の中に浮かんだ。

「婆ちゃん」

「ああ、分かっている」

差し出されるリュックサック。

全く、気が利きますこと。

『決して逃げてようとしてはいけないよ』

その言葉が、何度も頭の中で繰り返されていた。
カエデの手を引っ張って、部屋を出る。

「あ」

思い出して、振り返った。

「多分一日じゃ帰らないぜ」

玄関のドアを開いた。

快晴。急ぐことはない。

「行ってきます！」

何事か理解できずにいる父さんと母さんを置いて、俺とカエデは家を出た。

今、ここから始まる！

俺らの冒険が！！

……の、はずなのにカエデはさっきからずっと涙目で動こうとしない。

なので俺らは今、うちの目の前で立っている。

うん、さっきかっこつけて出て行ったのがすごく馬鹿らしい。

無理矢理引っ張っていかうとしても抵抗する。

うーん、こりやどうしようもない。

かと言って、うちに帰るのも癪に障る。

「うーむ…」

彼女の目を見る。

『早く帰りたい』

「いや、だからな？　そのために出かけるんだよ……って言っても分かんねーか」

……はあ。

しょうがない。一旦うちに帰ろう。
目の前にあるドアを開く。

「ただいま」

「はやっ！」

うん、予想通りの反応。

事情を説明すると、父さんがテレパシーでカエデに説明してくれた。
た。

時計を見ると、もう昼だった。

……しょうがない、出発は明日だな。

第三話（後書き）

こんにちは、なんかブログが更新できなくなって放置しているにーとんです。

ごめんね、ブログの皆さん。

さて、特に書くことはないんですが、後書きって何書けばいいんでしょうか？

近況とかかな？

そういえば今日は4月1日、エイプリルフルですね。

だからといって何かネタがあるわけでは無いんですが。

なんかダラダラと長くなってしまいましたのでここら辺でしめたいと思います。

では。

第四話

「さて…」

一応荷物の確認しておくか。

えーと…着替えはいらないかな。

うーん、でも女の子と一緒にだからな。

でもその女の子が着替えを持っていないわけだが。

と、袖を引っ張られた。

ん？振り返って見てみると、正座しながら、俺の袖を引っ張っているカエデがいた。

「ん？なんか用か？…ああ、何？自分の分も着替えがほしい？」

こっちの言葉は通じないが向こうの言いたいことは分かる。

しかし、俺男物しか持ってないしな。

いや、むしろ女物持ってたら問題だろ。

「これでいいか？」

割合無難なシャツを彼女に見せてみる。

うん、合格だそうだ。

それをリュックにしまう。

えーと、あとは…

と、またここで袖を引っ張られる。

「何？これだけじゃ足りない？…お前絶対どこかのお嬢様だろ。いか？旅に出る時は着替えで荷物を重くしちゃ駄目なの！分かる？……って言っても分かんないんだよなー、これが」

彼女は少し顔を傾げて、俺のことをじっと見ている。

…なんだよ、そんな目で見んなよ。

と、俺が固まっていると勝手にシャツをもう一枚俺のリュックに入れた。

このやろう。

俺はそのシャツをリュックから出した。

すると、カエデがまたそのシャツをリュックにいれる。

俺はそのシャツをリュックから出す。

カエデがシャツをリュックに入れる。

「……」

ちよつと頭に來たのでシャツをカエデに投げつけてやった。

ふつ。してやったり。

カエデはシャツが頭に被さっていて前が見えない状態になっていた。

俺はその場に座った。

さあ、準備準備。

着替えはこれでよし。

んでもって、食いもんは…と。

お。ばあちゃんが入れてくれてるな。

じゃあ飲み物…も入ってる。

こんなもんな。

リュックのファスナーをしめて、立ち上がる。

振り返ると、カエデがまだ一枚のシャツと闘っていた。

ちよつと見てるか。

あっちへヨタヨタと歩いて、こっちへフラフラと歩く。

と、カエデが俺の目の前までやってきた。

「よくここまで来れました」

シャツを取ってやった。

すると、カエデは一気に安心したようで、俺に抱きついてきた。

——え？抱きついてきた？

いや、ちよっと？カエデさん？

1分ほど、動けなかった。

準備も済ませたのでリビングへ。

「お主、女の匂いがする…」

ひいっ！

振り向くと親父が立っていた。

こええ、こええよ。

「く……父さんは…父さんは羨ましいぞ!!」

「母さん、晩飯まだ？」

軽くスルーしてやった。

あれ？そーいやカエデは？

振り向く。いない。

俺の部屋にいないのかな？

と、部屋に戻ってみる。

……いない。

あれ？ちよっとこれはまずいんじゃないやねえの？

「婆ちゃん！カエデ知らない？」

「え？お前の後ろにいるじゃないか」

「へ？」

後ろを振り向く。いない。

「いないじゃん」

「じゃあ、手を後ろにまわしてごらん」

手を、自分の体の後ろにまわす。
すると、頭に当たった。

え？なんで？俺の頭はこんなところにはありませんよ？
なんで頭に当たるのかな？

「全く、いつのまに懷いたんだか」

「へ？」

…ってことは、これカエデ（の頭）？
そうと分かれば。

ガシッと、（カエデの）肩をつかむ。

そして、首だけ振り向く。

…いた。

彼女はにこやかな顔で、こんなことを思っていた。

『お兄ちゃん♪』

……………悩殺っ！！

「ああ、レナが急に倒れた！（母）」

「っは、モテる奴は死ぬと昔から相場が決まっているのだよ（父）」

「悩ましいね」（婆ちゃん）」

第四話（後書き）

悩殺っ！！

俺だったら確実に死んでるぜこれ（笑）

第五話

リュック、OK

服装、OK

最後にカエデ、OK

「出発！」

さて、今の状況を分かりやすく描写しよう。

俺はリュックサックをしょっている。

さらに、その後ろにはカエデがいて、カエデは俺のリュックに抱きついている。

つまり、俺とリュックの間にはカエデの手がある。

すごく、鬱陶しい。

しかし、かわいいから許そう。

村の出口近くまで来ると、一人の男が立ちはだかった。

通称、大将のそいつは俺のことを憎らしげに見た。

俺は、そいつの心の中なんて見たくなかったので目をそらした。

「なんか用か」

俺が尋ねる。

「ここから先を通るなら、俺を倒してからにしろ」

そう言つてにやりと笑った。

またか。

こいつは勝手に村の子供たちの外出を制限している。

でも俺はこいつに何回も勝っているのだけれど。

「お前、懲りない奴だな」

「ふん、重そうな荷物と女を連れて俺に勝てるかな？」

なるほど、ハンデがあるな。

リュックをおろすにはまずカエデをどかさなくては。

しかし、俺がカエデから離れるとちよつと危ない。

実は昨日の晩に、お告げが出てしまったのだ。

お告げの内容はこうだった。

『言い伝えの少女が、この村にやってきた。見たことのない少女がいたら、捕まえることを最優先としろ』

あいつは俺の後ろにいるカエデがその少女だとは思っていないと思うが、他の奴らに見つかる場合もある。

ともすれば、やはりリュックとカエデ付きで闘わなくてはならない。

カエデのことを考えればやはり移動することは難しい。

移動せずに、攻撃、防御、回避を行わなくてはならない。

そのためには、やはり読心術を使うしかないのか。

大将の目を見る。

『まずはあの女』

……せこいな、全く。

と、そこで大将がこちらへ向かってきた。

カエデを狙うなら回り込む必要があるはず。

どっちから来る？

『右と見せかけて左』

俺にフェイントが通用しないことがまだ分かってないらしい。

大將は右（こっちから見れば左）に右足を移動させてから、左足を左（こっちから見れば右）に出した。

すべての動作は予想済み。

というわけで、足をひょいと出した。

奴はそれに簡単に引っかけり、一歩二歩とよろけてから体勢を立て直した。

「おめ、せこいぞ！」

それはどっちだよ。

『突進』

ああ、全く短気な奴だ。

突進なんかしたら俺がしゃがむだけで転んじまうだろうに……て待てよ？

うしろにカエデがいる。

カエデが俺の動作について来れるか？

いや、なるべく賭けはしない方が良い。

無難が一番なのだ。

だとすれば。

足を肩幅に開き、腰に力を入れる。

右手に拳を作る。

焦るな、タイミングを合わせるだけ。

簡単なことだ。

大將が声を上げてこちらへ向かってくる。

大將が拳を作って腰の辺りに構える。

大將が目の前に来る。

今だ。

俺は、奴のみぞおちに、奴の拳よりも速いスピードで、ストレー
トをかました。

奴は、倒れはしなかったが、しばらく動けなさそうだった。

俺はリュックからカエデを引き離して手を持ってその場から去っ
た。

第五話（後書き）

俺…バトル物は描写が苦手です。

第六話

「ここまで来れば大丈夫か…」

しかしな、今まで考えてなかったが確かに俺は重い荷物とカエデ付き。

もし誰かに見つかけば闘うことはまぬがれないだろう。

闘うことになったときに、俺は移動することができない。

なんか飛び道具でもあればいいんだけどな…

飛び道具…か…

カエデを投げてみるとか？

カエデが俺に投げられて敵陣に突っ込んでいくのを想像してみる。

………無理だ。

しかし例のお告げが行き届いているのも村の中だけだろう。

村から出れば何日間かは安全なはずである。

「……………腹減った」

カエデの目を見える。

なぜかカエデはニコニコしていた。

『お兄ちゃん強い♪』

「ぐはっ……」

レナードに200のダメージ。

この娘はこの後何回俺を悩殺するんだろうか。

怖くてしょうがない。

むしろ帰してやらないで一緒に暮らしたかった。

まあ、それは無理なことなので置いて：リュックから飯を出した。

カエデに差し出すと受け取り、包みを開け始めた。

中身は：穀物を固めて丸めた物（名前は忘れた）だった。

保存食としてはかなり使えるし、結構満腹になるものだが：

なにしろ味が無いのだ。

スープとかに入れて食うとうまいんだけどな。

「よし、カエデ。次の街でスープの材料になりそうな物を買おう」

そのまま食べようとしていたのを取り上げ、また包んでリュックにしまった。

昼飯は我慢だ。

晩飯を豪華にしよう。

何時間か歩いた後、やがて街が見えてきた。

いろんな食べ物が売っている。

宿屋もある。俺らはそんな金ないけど。

よし、まずは食い物だな。

いろんな店を回って、スープの具を買った。

「よし、じゃあスープ作るか」

街から少し離れたところで、俺は荷物を降ろした。

薪を集めなくてはならない。

俺は薪になりそうな枝をそこら辺から拾ってきて、カエデに見せた。

すぐにカエデは理解したらしく、薪を集めてきてくれた。

薪がいい感じに揃ってきたので、買っておいたマッチを擦って火を付けた。

中央に集めてある葉に火をつけると、その周りの細い枝が温められ始める。

やがて、細い枝に火がつき、同じように、太い枝に火がつく。

パチパチと音を立てながら揺らめく炎に俺たちは少し見とれていった。

飯を食い終わり火を消してリュックの中の寝袋を広げて、その中に入っていた。

カエデは歌を歌っていた。何の歌か分からないけど、きれいな声だった。

彼女の声を聞きながら目を閉じると、簡単に眠ってしまった。

第七話

みんなが、僕の近くまでやってきた。
みんな笑いながら、僕にこう言った。

「うらやましいぞ、レナード」

「カノからお前へ、ラブレター預かったんだ」

「読んでみるよ」

だけど僕は、みんなの顔を見て
――中身も見ずに、破ったんだ。

「おい、何してんだよ！」

動揺して、突っ込んで来る体を、僕はいつも簡単に避けて。
それにむかついた奴らの飛んでくる拳を避けて。
蹴りを避けて。

僕は、こう言ったんだ。

「本人からじゃないと、受け取れない」

分かっていたんだ。

それが、偽のラブレターだってことは、みんなを見た瞬間に分か
っていたんだ。

俺の、この行動は正解だったのだろうか。

みんなに騙されたふりをすれば良かったのだろうか。

答えは無かった。

何をして、嫌われるか、馬鹿にされるか。
だから。

だから俺は、孤独を選んだ。

そういえば、そんなこともあったよな。

夢の途中で覚醒して、少し考え込んでいた。

答えなんて無かったのだ。

ただ幼いながらも一丁前にこんなことを考えていた。

『孤独は、逃げではない。むしろ、わざと騙される方が逃げだ。孤独はある意味、もっとも辛い選択肢なのだ』

ばあちゃんの言葉は、それなりに俺を苦しめた。

『逃げてはいけない』というその言葉は、何を言いたかったのだろうか。

ただその言葉は俺の生き方を決めてくれた。

解釈として合っているのかは分からないけど。

「その孤独を選んだ俺が女の子と一緒に旅してんだから笑っちゃうよな」

思えば、俺を陰で苦しめていたのはこの娘だというのに。

だけど、俺が彼女を帰すのは自分の意志からなのかそれとも血筋のせいなのか。

それが分からなかった。

できれば、自分の意志でありたかった。

『やらせている』という感覚を人助けで味わいたくは無かった。

「腹減った…」

そこら辺はやはり、成長期真っ盛りの男子なのでしょうがないと思う。

「薪集めてくるかな…」

カエデから少し離れ、薪を集める。

太いもの、細いもの、その中間。

いくつか薪になりそうなものを集めて、また戻った。
そして、昨日と同じ手順で火をつける。

「あったけー…」

昼は暑い、夜と朝は冷えるのだ。

「お、カエデおはよう」

ふと、カエデの方を見ると彼女は上半身だけ起こしてこっちの方を見ていた。

かなり、眠そうである。

「朝食できるまで待つてなー」

通じないけど、一応声をかけておく。

その後、俺らはまた昨晚の残り物でスープを作り、出発の準備をした。

第八話

二人で歩いていった。

平原。風に緑の草がなびいていた。

まだまだ、洞窟までは遠い。

それに、いつ村の奴らが来るかも分からない。

急ぐにこしたことは無かった。

「しっかしな、もうそろそろ奴らと遭遇してもおかしくないはず」

そう、お告げが出てから二日目。

もうそろそろ村の奴らが出てきてもおかしくない。

うちの村はお告げを第一に重視する。

他の仕事も放って、こちらへ来ることも十分にありえる。

今までにも、何回か生け贄を捧げることはあった。

生け贄に選ばれた者は『村のために死ぬのなら本望』と言って自ら身を差し出す者もいたが、ほとんどが村から逃げ出した。

しかし、その中で生き残った者は一人もない。

それほどに、うちの村のお告げは重視されている。

となれば、生け贄の脱走を手伝っている俺は殺されてもおかしくないわけだ。

ただ、もしかしたら、その心配は全くないかも知れない。

何しろ俺らが村から出たのを見たのは多分大将だけ。

あいつはカエデがお告げに出てくる少女だとは気づいて無かったらしいから、大人に知れ渡る可能性はあまりないのかもしれない。

『レナード、聞こえるかい？』

声が、聞こえた。

婆ちゃんの声だ。

『よく、聞いてほしい。言い伝えの少女が村の外にいる、という噂が流れ出した。そちらへ行くのも時間の問題だ』

やはり、気づかれてしまっていたらしい。

『お前は、武器をそろえなさい。村の大人たちは完全な武装をして彼女を捕まえるつもりだ』

『彼女の脱走を手伝っているお前は、間違いなく命を狙われる。いくら読心術が使えるからと言って、武器や鎧が無ければやはり危ないだろう』

そして、頭に情報が流れ込んでくる。

最初のルートから少し、ずれたところに大きな街がある。どうやら、そこで武器をそろえるということらしい。

『そこで武具を買うには、ちゃんとした資格が必要なんだ』

『その街の騎士団の試験に合格すること。それが条件だ』

『攻撃、回避、防御がどの程度のレベルでできるか調べ、そのレベルに合わせて買える武具が変わるらしい』

『頑張りなさい』

そこで、声が消えた。

カエデが俺のことを見ている。

『どうして立ち止まっているの？』

どうやら、ずっと止まっていたらしい。

俺は歩き出した。

歩きながら考えた。

『回避、防御』については多分大丈夫だと思う。

読心術のおかげで、瞬発力には結構な自信があった。

しかし、『攻撃』についてはあまり自信が無い。

実際、俺は力で勝負すれば大将に負ける。

いつも勝つのは作戦勝ちである。

ただ、力だけで勝負するのは苦手だった。

「ま、行ってみるか」

とりあえず、行ってから考えることにした。

考えるのを止めると、急に腹が減ってきた。

街に行くのが待ち遠しくなっている自分がいた。

第八話（後書き）

くプロフィールく

カエデ

ニホンという国からやってきた少女。

レナード曰く、良いとこ育ちのお嬢様。

ただ、本当のことは分からない。

レナードのことを『お兄ちゃん』と慕う。

ニホンに帰るために、レナードと旅をする。

・・・需要が無いシリーズ第二弾。

第九話

街。通りのサイドには商店が有り、商人や客の声で賑わっている。食べ物、小道具、そして武具。

通りは人でごった返し、老若男女、色んな人が歩いている。子供たちの笑い声や、おばさんたちの世間話など。

いつも街は賑やかなものである。

ただ、俺はその賑やかさに未だに慣れられないでいる。

昔から、人ごみは嫌いだったのだ。

足踏まれるし。肩がぶつかるし。大男に弾き飛ばされるし。

とまあ、いろんな障害を乗り越えながらなんとか騎士団の集会所（？）の前にやってきた。

「試験を受けたいんですが…」

そう言いながら、戸を開けると、少し信じがたい光景があった。

おっさんたちが酒を飲んでいた。

…ここ、本当に騎士たちの集まりなのか？

そりゃ、騎士たちもぶどう酒かなんかを優雅に飲んでいても良いかも知れないが、この人たちは酒瓶にそのまま口をつけてゴクゴクと飲んでいるのである。

あんたら、街を守るのはどうしたんだ。

まだ真っ昼間だぞ真っ昼間。

「おいおい、このご時世に騎士になりたいなんていう奴が出てきたぞ、フヒヒヒヒ！」

かなり下品な笑い方をする。

「いや、俺は騎士になりたいわけじゃなくて武具を持ちたいんです」
すると、さっきとは別のおっさんが答えた。

「なるほどなあ…ただ、ここの試験に受かると、武具を持つことが許可されるが、最低でも一ヶ月はこの街で騎士として働かなくてはならんのよ」

「ま、昼間は酒飲んでるだけだがな、ギャハハハハ！」

それにしても、かなりの酔いっぷりである。
ただ、騎士として働くってのは想定外だった。

確かに、騎士の試験なんだから、当たり前かもしれないけど。
だが、こちらもこちらで引き下がれない。
おっさんたちに向かって頭を下げる。

「お願いします！俺はこの娘を守らなきゃいけないんです！」

必死にお願いした。こんなことは初めてだった。
心から願う。そんなことは今まで一回も無かった。

「…あんちゃん、本気なんだな」

「はい。だからどうか！」

「ただ、そういうわけにもいかねえ。騎士の試験を受ければ騎士になるのは当たり前。そうだろう？」

「はい」

やはり、駄目なのか。

「そう思い、顔を上げて俺と話をしているおっさんを見る。そして、彼の目は、彼の心を映し出した。」

『なら、受けなければ良いんだ』

その言葉を彼は口に出して言う。

「だったら、受けなければ良い話だ。この街で試験を受けなければ持つてはいけないものは剣、槍、銃、弓矢程度だ。そして、この街で売ってるものは剣、槍、銃、弓矢意外に一つだけ有る」

彼の目は、彼の口が動くよりも先に俺に物事を伝える。

『盾だ』

「盾だよ。盾は、試験を受けなくても護身用として持つことができるんだ。まあ、とげ付きの盾なんかは無理だがな」

盾。

人を守るためにあるそれで人を攻撃できるのか。

「でも、盾でどうやって攻撃すればいいんですか」

「ん？簡単なことだろ。ふちで殴りゃいいんだ」

…斜め上をいく答えだった。

第十話

集会所。何人かのおっさんと、俺と、カエデ。
アルコール臭いそこで、俺はおっさんの斜め上をいく発言に固まっていた。

「ああ、そうだ。何もわざわざ買うことはねえ。俺のお古をくれてやるよ」

そういつて、おっさんはがたがたとそこら辺を探し出した。

俺が硬直しているのも気に留めず。

頭の中ではさっきのおっさんの発言がぐるぐるとリピートされている。

『ん？簡単なことだろ。ふちで殴りゃいいんだ』

ふちで、殴る？

騎士ってのはそんなむごいことをするのか？

撲殺だよそれ。撲殺。

それも多分、死ぬか死なないかのぎりぎりのところを狙うやりかただよ。

もし死ななくても、後遺症とか残るよ。多分。

そんなことを考えていると、おっさんがこっちへ来た。

「ほれ。なかなかかっこいいだろ？な？な？」

「そんな自慢の物を今日会ったばかりの他人に渡していいんすか？」

半ば呆れながら聞いてみる。

「ああ。武具なんて、使われなくっちゃ意味が無い。人を守るためにあるもんが、そこら辺でホコリをかぶっている。それがあれば二人の命が救えるっていうんなら、俺はそんなものくれてやるよ」

：実に、おっさんは良いことを言ったと思う。

彼が酒臭く無ければ。

そんなことを考えていると、彼は俺の腕に盾を付けて、調整を始めた。

おっさんが持っていた盾は円盾のセンターグリップ式で、中心軸に持ち手がある。

直径は片手の拳から肘まで位の長さで、さほど重くはなかった。ていうか、軽い。これなら、付けていても大きな動きができそう
だ。

「ほれ。ぴったりじゃねえか」

「ありがとうございます」

彼はご満悦のようだった。

「よし、じゃあ基本的な使い方を教えてやる」

ついてこい、というと彼は集会所から出て行った。

それに俺がついていき、それにカエデがついてきた。

「ここだ」

よく分からない場所だった。

そこまで狭くなく、広くもないような場所。
おっさんはそこらにある棒を拾った。

「よし、それでは訓練を始めるぞ」

——右だ！

ガァン！という音が響いた。

彼が振り下ろした棒が俺の動かした盾に当たったのだ。

「うむ。反射神経はなかなかだな」

そう言いながらも棒を振ってくる彼。

カエデをかばいながら盾で攻撃を防ぐ俺。

「よし」

しかし彼はそう言って、ぴったりと攻撃をやめた。

「うむ。反射神経はなかなかだな。それでは盾での攻撃方法を教える」

…本当に盾で攻撃するんすか？

そう聞きたかったけど、言わないでおいた。

俺はおっさんから盾の使い方を教わった。

彼曰く、『武具の使い方は使う人の数だけある。自分流の闘い方を極めろ』だそう。

そして、俺とカエデとおっさんは今、街の飯屋にいる。

おっさんが『俺のおごりだ、食べ食べ』というのでせっかくだからおごってもらうことにしたのだ。

「うーむ…今日は中々いい日だった」

「いつもは何やってるんすか？」

「酒を、飲んでいる」

「…あ、そうっすか」

確かにそうだろうな。

「ああ、そうだった」

そう言って彼は席を立ち上がり、カエデに何かを渡した。

「なんすかそれ？」

彼は少し笑って、

「秘密だ」

と言った。

第十一話

事態は一転した。

おっさんと飯を食っている間に村からの追っ手がやってきたのだ。おっさんは『おまえらが連れてきたんだろ…全く』と言いながらきちんと騎士の格好をして出て行った。

しかし、まずいことになった。

居場所がばれてしまったからにはここを動かなくてはならない。それに…

この街が荒らされてしまったら、俺のせいだ。

「…よし。行くぞ、カエデ」

相手の気を引きながらも無傷でこの街を出て行く。

それしか方法は無いだろう。

騎士団の集会所から俺とカエデは出て行った。

街と外との境で、叫び声や、金属と金属の当たる音が聞こえる。本物の殺しあいだ。

「くそっ…」

俺のせいだ。俺のせいで…

村の奴らは何を言って争いが始まったのかは分からない。

そもそも、なぜあいつらは俺がここに知っているのだ。

何が、あった。

何があったんだ。

一生懸命考える。

村の奴らが、俺とカエデがこの街に入ってしまったことを見た、というのはいないだろう。

いや、だがそれ以外に原因は考えられない。

それか、単に調査をしに来て、おっさんが何か言ったか。

どちらにせよ、お世話になったこの街を、自分の村の奴らに滅ぼさせるわけにはいかない。

俺は近くに寄った。

右手には盾、左手にはカエデの手。

戦況は：街の方が勝っていた。

金属と金属の当たる音、叫び声。

おっさんが気づいてこっちを振り向いた。

彼は叫ぶ。

「逃げろおおおおお!!」

そう叫びながら、持っている剣で敵を斬る。

わざと、致命傷を外しているようにも見えた。

俺はカエデの手を引いて走り出した。

地を蹴る、腕を振る、逆の足で地を蹴って、逆の手を振る。

その繰り返し。

門まで来た。村のみんなは俺を見て、驚く。

レナードだ、あれはレナードじゃないか、という声が聞こえる。

そして、俺とカエデは門を通り抜けた。

「おっさん!ありがとうございました!!」

「おっさんじゃねえ!師匠と呼ばえ!!」

そんな叫び声を聞きながら、俺とカエデは走り続ける。
酸素が足りてない。だが、走らなくては。
走って、走って、走り続けた。
そして、俺とカエデは街をでた。

第十一話（後書き）

長らく更新してませんでした。
すいません

第十二話

街を出ると、村の奴らがいた。
第二軍、みたいなものらしい。

「おい！あそこにレナードがいるぞ！」

「あの女の子は誰だ？」

そう言いながら近づいて来た。
大丈夫だ、気がついていない。

「おいレナード、彼女とデートか？」

「そんなんじゃないっすよ」

笑いながら答える。

「その女の子、レナードのこと宜しく頼むぞ」

「……………」

もちろん、カエデは何を言われているか分からずだんまりを決め込んでいる。

「ん？どうしたんだ、しゃべれないのか？」

すかさずフォローしようとしたそのとき、カエデがスプレー缶を上着のポケットから取り出し、ノズルを村の奴らに向けた。

カエデは、俺の手を引いて、なぜか少しずつ横に移動する。すると、村の奴らも自然にそれに合わせて逆に動いた。

『撃つ？』

目で尋ねてくるカエデ。

「な、なんだそれ？」

驚く村の人々。

大丈夫だ、俺はテレパシーは使えないが知っている。

ジェスチャーは、全国共通であることを。

カエデの持っている物がなんであれ、ここで疑われたらまずい。

そこで俺は否定の意で、親指を下にして右手をカエデに見せた。

すると、カエデは、それをどう汲み取ったのか分からないが、ス

プレーの噴射ボタン(?)を押した。

押して、その場から一目散に逃げた。

俺は何が何やら分からず、その場に突っ立っていたが、カエデに手を引っ張られて、一緒に逃げることになった。

後ろで、村の奴らが咳き込む音が聞こえた。

しばらく逃げてから、カエデは俺にスプレーを見せた。

そこには『催涙スプレー』と書いてある。

「…まさか、おっちゃんいや、師匠か？」

そういえば、飯を食つてるときに何か渡していた様な気がする。

そして、気づく。

さっきカエデがスプレーの中身を噴射したときのことを。

カエデは、ゆっくりと横に移動して。

そして、どうなった？

そうだ、風上に回ったんだ。

風を受けてこちらに中身がこないように。

「す、すげー」

感心である。

なぜカエデが催涙スプレーの使い方を熟知しているのかは知らないが、とりあえず感心だった。

親指を下にしたら撃つ意味は未だに理解できないが、これからそれを合図にすれば良いことに気づいた。

「とりあえず、今日は近場で野宿だな」

歩いて、ちょうど良い場所を見つける。

薪になりそうな枝を拾って来て、前のように組み立てた。

そして、火を付ける。

そしてバッグの中をあさってから俺はこう呟くのであった。

「食い物が、ねえ…」

第十二話（後書き）

そして長らく更新していないことに気づく俺。
週一ペースになるっぽいです。

第十三話

「まずいな」

街を出た翌日、俺とカエデは草原をただひたすらに歩いていた。そして、食糧難である。

しかも金が無い。

「これはかなりまずいぞ…」

次の街に寄っても金が無ければ食いものを買うこともできない。だが、寄るか寄らないかでは幾分か違うかもしれない。しかし寄ったところで何かできるわけでも無いだろうし…

「うーむ…、まあいっか」

悩んだ結果、寄ることにした。

もしかしたら、何か良いことがあるかもしれない。藁にもすがる思いってやつである。

街。こないだ寄った街と同じく、通りは人で溢れている。そして、俺は一つの貼紙を見ていた。

『第三十回トーナメント開催！参加者求む！』

そう書かれた文字の下にルールと、順位別の賞品について詳しく書かれていた。

『ルールはいたって簡単。相手が降参、又は動けなくなったら勝利。ただし、相手が降参しているのに関わらず攻撃をしたものは退

場となります。武器は自由です」

『賞品は三等・・・半年困らない程度の食糧、二等・・・乗船券、一等・・・自動車一台』

とのことだった。

「どれが良いかな」

腹が減ってる今では三等が良いと思う。

だが、二等や、一等などの移動手段を手に入れられれば村の奴らと会うことはまず無くなるだろう。

「うーむ・・・」

そんなことを悩んでいるとグルルと腹が鳴る。

「腹減ったあ・・・」

ま、とりあえず申し出に行くか。

「それでは、健闘をお祈りします」

笑顔のお姉さんに見送られて、宿屋に向かった。

飯付きの宿屋を無料で使える券をもらったのはとてもありがたかった。

前払いの参加賞のようなものらしい。

俺とカエデは指定された部屋に向かった。

部屋につくと、まず俺は盾に不具合が無いか確かめた。

少し緩んでいるベルトを締め直す。

次に、カエデからスプレーの缶を受け取って、不具合が無いか確

かめた。

催涙スプレーは、一回発射すると液がノズルの先で固まることがあるという聞いたことがあったからだ。

案の定、スプレーのノズルの先は得体の知れないもので固まっていた、俺はそれを布で綺麗に拭いた。

すこし傾けて中身がまだあることを確かめてから、カエデに返した。

しばらくすると、宿屋の女将さんのかわいい娘さんから飯だと呼び出された。彼女の可愛い声ににこやかに答えると、なぜか隣のカエデに脇腹を小突かれた。

彼女の目は俺に『お兄ちゃんの馬鹿』と伝えた。

俺とカエデは豪華な飯に舌鼓を打ちながら、全てを平げた。

「うー、腹一杯だ」

幸せだった。

とりあえず、明日に向けて後は寝るだけとなった。

第十三話（後書き）

少し近況をば。

一つ目、定期考査が近いので更新は不定期になるであろうこと。

二つ目、俺が前まで書いていた『告白は激闘だ。』という小説が3万HITしたこと。

三つ目、3万HITでテンションが上がっているので、『告白は激闘だ。』の続編を書く可能性があること。

以上です。

あー、勉強しなきゃ…

第十四話

と、いうわけで俺らはコロシムにいた。

「それでは、第一回戦、スタート!!」

そして、始まった。

ルールにおいて補足しておく、チームトーナメントの出場は二人から三人まで。

その場合は個人戦とは別の試合になる。
ただし、賞品は同じ物。

俺とカエデが対峙している相手は、二人だった。

俺らと十歩程度の間隔。

武器は何をもっているのか分からない。

二人とも長身で、コートを着ていた。

片方は、帽子をかぶっていた。

帽子をかぶっている方の目を見る。

『あと3秒、2、1、0!』

ガアアン!!

音と、右手に衝撃。

見ると、二人ともナイフの様な物を持っていた。

帽子をかぶってる方は、右手に一本。

かぶっていない方は、両手に一本ずつ。

帽子をかぶっている方が左手のそれを投げたらしい。

カエデを後ろにして、次の攻撃に備える。

俺は二歩、カエデと一緒に前にでる。

「ふん、防ぐだけですか？」

帽子をかぶっていない方が語りかける。

二歩、前に出る。

「それは、どうでしょう？」

答えながら二歩。

あと、四歩。

「くらえっ！」

『一発目は、フェイク！』

言いながら、帽子をかぶっていない方がナイフを投げる。

俺はカエデの手を引っ張ってそれを簡単に避ける。

次の一発を盾で弾く。

二歩近づく。

後、二歩。敵のナイフはあと一本。

『ぐふふ、今だ！』

帽子をかぶっていない方がコートを開いた。

コートの裏側には、ナイフがたくさん横向きに、横一列に付いている。

もうちょっと細かく説明すると、付いている、というよりも引っかかっていた。

だから、男がコートを右手で内側に払うと、引っかかっていたナイフが飛んで来た。

盾を振って、当たりそうなナイフだけをたたき落とし、一歩近づく。

帽子をかぶっている方が最後のナイフを振り下ろした。

それを俺は左に避けながら、盾で受け流す。

そのまま盾を前に持って来て、軽く男を押した。

帽子をかぶっている方と、かぶっていない方二人が、横一列に並んだ。

俺は、親指を下にして左拳を作った。

『…?』

彼らの心が読めたのは、そこまでだった。

白い霧状の物が、二人の間を通り抜けた。

残った霧を吸って彼らはむせて、涙目になって、しゃがみ込んでしまう。

カエデの催涙スプレーだった。

動けない状態、ということで彼らは敗北となった。

第十四話（後書き）

来週からテストだー！
くっ…死ねるぜwwww

第十五話

「あ…」

事件が起こるのはいつも突然である。

そんなことを改めて認識して、俺は悩み始めた。

カエデの催涙スプレーの中身が無くなったのだ。

「どうしよう…」

ちなみに明日は準決勝である。

結構な強者が出てくるはずだ。

「とりあえず、外に探しに行こうか」

近くで俺のことを観察していたカエデの手を取って、宿から出た。

「吸い込んだら咳き込む、涙が出る、か」

あまりそんなものは無いと思う。

匂いからして、いままでスプレーの中には酸性の物が入っていたようだった。

「うーん…どっかに催涙スプレーそのものが売ってたりはしないのかな？」

とりあえず、色んな店を見て回ったが、そんな物はどこにも無か

った。

ただ…

そして、二回戦目。

敵は、二人。剣を持っていた。

「おいおい、こんなちびちゃんたちが敵かい？」

「余裕だな…」

そして、彼らは跳躍した。

右と、左から。

俺とカエデは互いを守るように背を向けあう。

そして…

「死ねえ！」

容赦なく振り下ろされる剣を盾で受ける。

と、同時に後ろで男の咳き込む声がした。

「な、なんだ？」

剣の重みを盾で支えながら、質問に律儀に答える。

「唐辛子エクス、です」

そして、カエデが振り返って、それはもう容赦なく彼の目に向けてスプレーを発射した。

「うおおおお！」

かなり痛いらしい。当たり前だ。俺はあんなことされたくない。満足したのか、カエデはまたくると向き直って、咳き込んでる男の首根っこを持ち：

またまた、容赦なく眼球に向けてスプレーを発射した。

「うおおお：ゲホッゲホっ！！」

叫ぼうとしても咳き込む。

当たり前だ。俺は死んでもあんなことされたくない。

そして、判定。俺らの勝ち。

俺は、観客に目を向けた。

そして、その中にいるゴツイ三人組。

声は聞こえないが、目を見て考えている事を読み取る。

『相手の切り札さえ分かればこっちのもんよ：』

本当の切り札は、俺が持ってるんだよ：

彼らが裏をかくのなら、俺は裏の裏をかこう。

力が無いから、頭を使おう。

そして、この読心術を。

第十五話（後書き）

よっしゃ、今日から週一更新復活！

第十六話

そして、次の試合が始まった。

これが準決勝。明日が決勝。

敵は、昨日見たゴツい3人組だった。

三人とも、銃を持っているようだ。

そして、三人ともゴーグルとガスマスクを付けていた。

少し厄介になりそうだ。

試合開始後、俺はカエデを引っ張って、俺の身長の半分ほどに積み上げられた瓦礫にしゃがんで隠れる。

発砲音が続いて、三発なって瓦礫に当たった。

「さて、どうしようか」

ゴーグルは透けて見えるので、一応読心術は使える。

だが、催涙スプレーが使えないのは困る。

ちらっと、顔を出して、三人の中の一人の顔を見る。

『強化されたこの弾は、盾では防げまい』

なるほど、弾を強化してあるらしい。

瓦礫から出るに出られない。

困った。

「今降参すれば許してやるぞ」

三人の中の一人が言った。

ここまで来て降参は嫌だ。どうせなら優勝したいものだ。

「嫌だと言ったら、どうします?」

「遠慮なく殺す」

「そう上手はいきませんよ」

そう、昨日彼らを見たときに、解決策は思いついていたのだ。
カエデのベルトにぶら下がっているスプレーの中から、一つを取り出す。

そして、

「うおおおおおらあああああ!」

突撃した。

一瞬彼らは驚いたようだが、すぐに俺に銃を向けた。
そして、発砲音ではなく、噴射音が早かった。

俺の手元にあるスプレーから噴射したのは、普通の、ペイント用のスプレーだった。

三人のうちの一人のゴーグルにそれを噴射したのだった。
それから、立て続けに驚いている残りの二人にも噴射した。

「くそっ!」

三人は視界を奪われ、銃をどこに向ければいいのか分からなくなっている。

そんなこんなしている間に、カエデは俺の隣に立っていた。

「今、降参すれば許してあげますよ?」

「嫌だと言ったら？」

三人のうちの一人がそう言って、

「遠慮なく、やります。」

俺はそう答えた。

そして、カエデにいつものサイン。

カエデは俺がガスマスクを外した彼らの口に片っ端から唐辛子エキスを噴射していった。

何週間かは喋れないだろう。かわいそうに。

試合終了の合図が鳴り、俺らの勝利であった。

第十六話（後書き）

このサイト、部活、と小説を書きまくりです。
締め切りに追われる作家気分だね！！

第十七話

「よう、レナード！久しぶりだな！！」

どうしよう…と、思った。

どうしようもない…と、思った。

だって、決勝での俺たちの敵だったのは…

「お…おっちゃん！？」

「師匠だと言っているだろうが！！」

そう、師匠ともう一人のおっちゃんだった。

「何しにこんなところに？」

「いやあ、自動車があれば酒を買うのも早いな、と思ってな、ガッ
ハッハ！」

「……」

啞然とする俺。

「だいたい、お前こそ何やってんだ？自動車を手に入れても運転で
きないだろ？」

確かに。

「ここで降参しな。俺らが車で乗せてってやる」

「はい…降参します」

「馬鹿野郎!!」

「うおい!!」

びっくりした…何がしたいんだ師匠は…

「ここまで来たなら勝ってみやがれ! お前らが勝っても車は没収だ
がな…」

ひでえ…

そして、最終戦が始まった。

二人とも騎士の格好をしている。

鎧、盾、剣の三つを持っていた。

「行くぜ!! この一撃を受けてみろおおおお!!」

縦に振り下ろされた剣を右に避ける。

「うお! 受け止めろと言ったのに!!」

右から左への薙ぎ。予測済み。

しゃがんで避ける。

ちなみに、もう一人は奥の方で座って酒を飲んでいた。
カエデは何もすることが無くって、おろおろしていた。

「ふっ、俺が教え込んだ甲斐があるな…」

なんか色々とかオスである。

1対1の試合になってるし。

師匠と弟子の対決だし。

向こうは剣と盾と鎧だけど俺は盾しか持ってないし。

「うおりゃ！」

突きの攻撃を左に避ける。

しゃがんで、膝のバネを使い、盾のふちを鳩尾に叩き込む！

「ぐほっ」

一瞬よろめいたところに追撃をしようとするが…

「甘い！」

盾で防がれる。

『ようし、なかなかの腕だな。ここは一つ、遊んでやるか』

師匠の思考が頭に入ってくると同時に、師匠は剣を捨てた。

甲高い金属の音が耳に響いた。

「お前がこの剣を使って、」

そう言ってもう一人の酒を飲んでいるおっちゃんを指差す。

「あの酒瓶を壊したら勝ちだ」

出ましたよ、むちやくちゃルール。

「いちについて」

おっちゃんが剣を踏んで、

「よい」

俺が身構える。

「スタート」

なんだか分からないルールで、本番（？）が始まった。

第十七話（後書き）

うーむ、最近自分の作風というのを見失ってしまったような気がする。

俺三人称の方が書きやすいのかな？

第十八話

「よい、スタート」

無茶振りのなルールで始まった戦い。

師匠の足の下にある剣でもう一人のおっちゃんの手にある酒瓶を壊せば勝利、らしい。

「さあ、かかってこい！ふはは！」

言いながら、師匠は相撲取りの様な格好をする。

俺は相撲なんかしないぞ。

おっちゃんの目を見る。

『とっとと終わらせて酒飲みてえ』

…だめだ、関係のない情報だ…

しょうがない、当たるが吉か。

盾がちゃんと腕についているのを確認してから、師匠に向かって走り出した。

師匠は盾を構える。

ガンッ！と、盾と盾がぶつかる音。

駄目だ、近すぎる…

俺が離れると師匠は不思議そうな顔をする。

まあ、当然の反応なんだろうけど…

「どうしたレナード、俺の口臭に耐えられなかったか？」

「いや、口臭とか関係ないけど…」

それにしても、だ。

不利なところも有るじゃないか。

最近は読心術を便利だと思って使っていたが、やはり欠点も有るのだ、忘れてたけど。

思い出したのは、昔、ばあちゃんが言っていた言葉だった。

『読心術を使う時は、いくらか相手との間に距離をとりなさい』
俺がなんで、と尋ねると

『情報量が多すぎて、脳がパンクしてしまうから』
との答えだったのだ。

今までは、近づいても顔と顔で向き合う事は無かったけど、ここまで罅迫り合い（盾だから罅迫り合いじゃないだろうけど）をするようになるややはり危ない。

「ふはは、この試合に負けたら酒を買ってもらおうぞ！」

最低だ…

「俺も金がなくてこの試合に出てるんですけど…」

「それがどうした」

「いや、だから…」

なんか会話が成り立たない…

とにかく、あの剣を奪わなくては。

「師匠、失礼」

おもいっきし足をあげて、蹴ったのは…

「う…お、おのれ…うううう、レナアドオオオオ…ううう」

この反応を見れば分かると思うけど、男の大事なところ。
軽くなった師匠をどかして、剣をとる。

「よおし、とつげえき！」

言葉の通り、酒を飲んでいるおっちゃんに突撃！！
と思ったら、

「お前なんか割られてたまるかぁ！」

酔っぱらったおっちゃんが、

「うおおおお」

酒瓶を、

「りゃ！！」

地面に叩き付けた。

「あ」

俺が呟いたときにはもう酒瓶はきらきらと光るガラスの破片にな
っていた。

第十八話（後書き）

最近更新ができてないぜ！
ごめんね、みなさん。

第十九話

「師匠、この車エアコン無いんすか？」

「贅沢を言うんじゃない」

「師匠、酒臭いです」

「なんなら降りて歩くか？」

「すみませんでした」

というわけで。

今、俺とカエデは師匠とおっちゃんの車の中。

結局あの勝負は師匠たちの勝ちになった。

師匠曰く、『剣で酒瓶を割ったら勝ち』だったのだから、それ以外は負けだそうで。

「ところで師匠」

「ん？」

「俺らが師匠の街から逃げた後、どうしたんですか？」

「盾だけで十分」

「酒瓶だけで十分だな」

師匠とおっちゃんが答える。

てか酒瓶は危ないでしょうに：

「ところで、お前らが向かってるのってこっちで良いのか？」

「はい、大丈夫です」

師匠が車に乗せて連れて行ってくれるそうだ。ありがたい。

「しかし、ここら辺の洞窟って言ったら…」

「ああ、あそこだろうな」

師匠とおっちゃんの会話。てかなんかあるのか？

「何かあるんすか？」

「お前さ…」

そこで一旦言葉を区切る師匠。

「読心術、ってのが使えるか？」

「……………」

わあ、なぜ分かるんだろうか。

どうしようかな。これは言うべきか、嘘をついて言わざるべきか。

「ま、言いたく無いんなら言わなくていいけどな」

「いや、それって肯定してんのも同じですからねー」

しょうがない、言うしかないだろう。

「まあ、読心術は使えます。でもなぜそれを？」

「やはりか。あそこの洞窟はそういう奴らが行く場所だからな」

そういう奴らって、どういう奴らだ：

「超能力者が行く洞窟、だそうだ。俺の知り合いにも超能力者がいてな…」

「どんな能力ですか？」

「未来を読む、みたいな感じか？つまり予知能力」

「へー」

あれ？そういえばなんで俺が読心術使えるって分かったんだ？

「なんで俺が読心術使えるって分かったんすか？」

「んー、いつものお前の行動。だいたい、何もしゃべらない女の子と意思疎通してるところからおかしいだろ」

「ああ、なるほど」

もうちょっと慎重にいなきやな。

「話を戻すが、そこの洞窟は超能力者の能力を高める場所だそうだ」

「はあ…」

あれ？じゃあなんでカエデを戻すためにそこに行かなきゃならないんだろうか？

「えーと、少し長くなりますけど…」

そこで、カエデが異世界の住人である事、カエデをそっちの世界に帰すために洞窟を目指している事を伝えた。

「……で、能力を高めるのって、カエデを帰すのとは関係ないと思います。」

「知らん。俺に聞くな」

……確かに。

第十九話（後書き）

なんか知らない間に大詰めにw

今回は伏線張りまくったぜ！

つうわけで需要の無いプロフィール紹介を久しぶりにやるかw

プロフィール

（師匠）

本名は決まってないw

なんか色々と未知数。レナードに盾術を教えた張本人。

お酒大好き。

第二十話

やはり、車というのは速いもので…

「着いたぞレナード」

「速い…」

目の前には、森が有った。

俺らの正面には切り開かれている道があり、その先に洞窟の様なものがある。

洞窟の入り口の両脇には光が灯っている。

空を見ると、もう夕方であった。

「うーむ、今日は一旦飯を食って寝るか。明日から中に入ろう」

師匠が提案し、俺とおっちゃんが賛同。

4人で飯を食い、カエデは車の中、男組は外で火の番を交代しながら寝た。

朝が来た。

「起きろー」

師匠が眠そうにおっちゃんを揺すっている。

車のドアが開き、カエデが出て来た。

「よし…朝飯だ」

師匠の作る飯は何気にうまい。

4人とも完食、洞窟に入る道具を用意し始めた。

「たいまつ、剣、盾、携帯食料…こんなもんか？」

「そうっすね…」

そんなわけで、飯を食ってから数十分後。
俺らは洞窟の前に立っていた。

「行くぞ…」

師匠が先導をきり、俺、カエデ、おっちゃんが続くが…

「うお！」

師匠、入り口直前で尻餅。
酒飲みすぎだろ。

「おっかしーな」

言いながら、歩き出そうとして転倒。

「……結界か」

おっちゃんが呟いた。

「え…結界？」

「ああ、多分特殊能力がある人間しか入れないんだろうな」

まじっすか…

「じゃあ、行けるのって俺だけ？」

「さあな…まだ自覚してない能力が俺にもあるかもしれん。透視能力とか」

このおっちゃん、変態である。

しかしそんなことを言いながら洞窟に入ろうとしたおっちゃんも尻餅をついたわけで…

「じゃあ、俺が行ってみるか」

俺が通れてもカエデを帰すのに関係ない気がするんだが

「お、通れた」

「うーむ、レナードだけ転ばないのは悔しい」

師匠が呟く。ひでえなおい。

「カエデは？」

おっちゃんが言う。尻餅をつかせるわけにもいかないので、俺が抱えて通る。

ちなみにカエデの希望によりお姫様だっこ。腰が痛くなるぞおい。

「あら、通れた」

師匠の言葉。

てかなんで通れんの？

「じゃ、そういうわけだから」

おい！置いていくのかよそこで！

って、ジョークかと思ったら本当に歩いていつちやうし…

「じゃあ、飯用意しながら待ってるぞ！」

「はい、りょーかい」

しょーがねえな

「行くぞカエデ」

手を握って、地面が滑る洞窟を歩いていく…

第二十話（後書き）

あ…あれ？

もうちよつと続くはずだったのに終盤のストーリーが…

うーん、もう一人の俺が『告白は激闘だ。の続編早く書こうぜ』と
うるさいぜw

第二十一話

「ここは…?」

光が反射しまくって、辺りを照らし出していた。
洞窟内の湖か…

「行き止まりか？」

目の前には湖が広がるばかり…。
もう道はないように見える。
…と、カエデが、

「え? これ水じゃねえの?」

湖の上を歩いている。
遅れてはいけないとカエデの後を追うが俺には水の上を歩く事な
んてできなかった。
バシャーン!

「…どうなってんだ?」

急いで水から上がる。
カエデはこっちを見ていた。
不思議そうな顔で。

「いや、こっちがそういう顔をしたいんだけど?」

しかしカエデは一人で行ってしまう。

どんどん遠ざかって見えなくなつて…

…光が、うまれた。

「うおっ！まぶしっ！」

強烈な光だった。

湖が光ってる。

思わず目を閉じる。そして…

「どうなつてんだ？」

目を開けたときに、湖は無かった。

「さっきからわけわかんねーよ」

カエデが湖の上を歩いたと思ったらその湖が光って無くなる。

まとめてみたけどさっぱり分からん。

すると…

「ありゃ、パワーが増大しすぎて隠せなくなっちゃった」

カエデが遠くに見えて、その隣に一人、俺と同じ年位の女の子が。

「おっす、レナード！元気してた〜？」

「カノ？」

その女の子は、俺の好きだった女の子だったりして…

いや、意味わかんねーよ、なんでここで出てくるのさ！？

「相当混乱してる？」

「混乱しすぎてる…」

「よろしい、説明して差し上げよう」

その何秒後かに

「あ、でも大声出すの疲れるからこっち来て」

カノは笑いながらそんなことを言った。

第二十一話（後書き）

遅れました：

すげえ短い気がする W
W

第二十二話

「うーんと、一から説明するとね。私も能力者なの」

実は説明二回目。お脳の無い俺はもう一度まとめて言ってもらおう事にした。

「ああ、そうじゃなきゃここには居ないだろうからな」

そこまでは分かる。

「うん。それで、まあ私の能力は色々あるんだけど、その中の一つが透明化。だからレナたちは私に気がつかなかった」

「ああ、なるほど。ちなみに俺の名前はレナードだ」

そこまでもさっきので分かった。

「だけどレナ達の中に一人、気づいてた娘がカエデなの」

「うーん…、それがカエデの能力なんだよな？」

「そう。カエデも能力をもってる」

「それが能力を半減する能力、と」

カエデは能力者で、人の能力や魔力とかのファンタジーな力を半減する能力をもっているらしい。

だから、カエデはカノに気づいていた。

そして…

「俺が知っているカエデの心はカエデのものじゃないのか…」

「多分、ね」

この『半減』というのがややこしいらしい。

これは俺らが能力を半減されている事に気づかないような半減の仕方らしい。しかもカエデ自身がコントロールしているわけでもないから、半減している時としていない時もあるとか。

要するに、俺がずっとカエデのものだと思っていた『心の中』は実はカエデのものではない、という可能性があるのだ。

「まあ、実際に綺麗な心をもっているのかもしれないけどね。でも、多分今までみていたものとは別物だよ」

「そう、か」

俺はずっと疑わなかったのだ。

カエデという女の子の目は、とても綺麗で。

心の中もとても綺麗で。俺の知らない輝きがそこにあったのだ。なのにそれは偽物で。

信じていたのに。ずっと、あの瞳を。

「それで、カエデが湖を歩いていたのはあれ自身が魔力の固まりみたいなもの…。どうでもいいか」

カノがこちらを心配そうにみている。

カエデはそこら辺をふらふらと歩いている。

「俺は、中途半端に能力を持っているんだな。最初から分かっていたらいたした事無かったのに」

「それは違うと思うよ。異世界から来た人の能力はたまにとてつもなくすごかったりするから」

「なんでこんな能力あるんだろ。昔からこれのせいで苦労してきたしさ」

「はあ…」

ため息をついてカノが立ち上がった。
歩いていって、カエデの肩を後ろから掴んで。

「この娘のため、でしょ！」

元気づけようとしてくれたのか、無理矢理に笑顔を作っていた。

もう、良いか。

いつまでも落ち込んでてもしょうがないよな。

「そうだな。うん、それもそうだ」

頑張らなくては。とりあえず彼女を元の世界に帰すまで。

それで。

それからのことはその時に考えれば良いんだ。

第二十二話（後書き）

さて。

実はこの後、二種類の終わりを考えてあるんですW
どっちにしようかなW

第二十三話

「で、なんでカノは透明化を解いたんだ？」

「ん？ いや、能力を無効化されたわけだけど」

「…まさか、カエデの能力が強くなったってことか？」

「そうね。別にすべての能力を無効化できるわけじゃないっぽいけど、結構力が強くなってる」

なるほどね。あれ？ そういや俺はパワーアップしないで良いのか？
そもそもこの洞窟にくる必要が分からないんだけど…

「カエデを元の世界に帰すのは私だよ」

「ん？ ああ、そうなのか」

「うん。ま、正確に言えば私とレナだけだね」

「よく分らんけどそうなんすね」

さっぱりわからんぜ。

「まあいいや。いい？ 私の家系とレナの家系は元々は一緒だったの。
異世界から来た子に戻すっていう家系」

「へー」

「で、あるとき二つの家系は分かれてしまった。だけど、その分それぞれから一人ずつ、儀式には必要となったわけ。以上。説明終わり」

「なんとなく分かった」

「で、この洞窟の力を増大させるというのはある意味カモフラージュの様なもの。一日でもすれば元通り」

「はあ？じゃあここは…」

「そう。カエデのためにあるような洞窟。私とレナは力を増大できない。その代わりにカエデを帰す力がうまれる。まあそれも一日で無くなるけど」

「あー、なんだかサッパリだぜ。とりあえず、俺とカノで協力してカエデを帰せば良いんだろ？」

「まあ、そういうこと」

あー、まあそういうことなら簡単だ。

「じゃあ始めようぜ」

「そうだね」

カエデを手招きするカノ。

「じゃあこの壁をずっと見て」

壁？ああ、これか。何も無いけど…

「いくよ？」

そうカノが囁くと、壁がだんだんとぼやけてくる。

そして何かの輪郭が…。目？

その瞬間。

ものすごい量の情報が頭に入ってくる。

いや、これは情報ですらない？何だこれは？

「いい？今から、頭ん中に出て来た言葉をパツと言うの。何も考えなくて良いから。せーの！」

不思議だな、と思った。

自分の意志に関係なく口が動く。

自分でも何を言っているのか分からない。

だけど、周りがだんだんと明るくなって。

そしてー

エピソード第一話

人の気持ちが分かったら、なんてことを思う人がいるだろう。しかし、人の気持ちが分かったところで良いことはあまり無い。人々の汚れた心を見るだけで自分がうんざりしてくる。

そのせいで俺はずっと、他人とは深く関わらずに生きていた。怖いからだ。その、汚れた心に自分が浸食されていくのが。

言い伝えがある。

この村に伝わる、言い伝え。

『いつか、見たことも聞いたこともない場所から、人間がやってくる』

『その人間を生け贄に捧げればこの村は二度と、食べる物に困らないだろう』

正直、ありえないと思っていた。

だって、見たことも聞いたこともない場所ってことは要するにこの世界ではないどこから来るってことだ。

異世界から人間がやってくる？そんなのおとぎ話でしかない。

言い伝えがある。

我が家だけに伝わる、その時が来るまで決して他の人に告げてはならない言い伝えが。

『見たことも聞いたこともない場所からやって来たその人間を守るために、うちの家系には二つの能力が授けられていた』

『一つは、相手の瞳を見るだけで心が分かる力』

『もう一つは、言語の違いをも無視して、相手の心に直接語りかける力』

『しかし、いつしかその力は衰え、ほとんどの場合どちらか一方の

力しか使えなくなってしまった』

しかし、俺には実際に人の心を読む力がある。
そのせいで、何度か苦勞した。人から離れるようになった。

うちの婆ちゃんは一つの能力を使える、きわめて特別な存在であった。

そのために、彼女はいろんなことを知っていた。
あるとき、こんなことを言っていた。

『いいかい。我が家には、人を守る使命がある。だからお前には、その読心術がある』

『その力は、お前を苦しめるかもしれない。ただ、それは同時に人を守る力にもなるんだよ』

『だからね、決して逃げようとしてはいけないよ』

そして、その言葉の真意を今日も考えながら。

その言葉の真意を考えながら、俺は歩いていた。

俺と、俺の家族、カノと、カノの家族。

あれだけの騒ぎを起こしたのだ。

村からは逃げるしかない。

これからどうするのだろうか。俺には分からない。

「あー、なんか拍子抜けだぜ」

「ははは、何言ってるの、あんなに泣いてたくせに」

「いや、それはだな。その、うん…」

洞窟内で、俺の口から出て来た言葉は異世界への移転用のワープホール(?)を出現させるための呪文のようなものだったらしい。もの凄い量の情報だったため、俺は倒れてしまい、その間にカエデは帰ってしまったとか。

「結局、見送ってやれなかったな」

「その方が良かったんじゃない？見送ったら号泣だよきっと」

俺らは街を転々とした。
そして――。

エピソード第一話（後書き）

なんか途中で打ち切られるアニメみたいな展開だぜ（笑）

もうちつと続くんでもうしばらくお付き合いください。

エピソード第二話

そして、俺らはひとつの街に着いた。

「ここは、滅んでしまった街だね」

「そうだな」

建物は全て廃墟だった。人は一人も歩いていない。

「ここは、いても意味が無いよ、行こう皆」

俺の父さんがそう呼びかけた。

「…何か、おかしいよね」

と、カノが言う。

「ああ、おかしいよな」

俺も同意する。

なぜか、人の気配がするのだ。

「どこだろう…」

カノが歩き出し、俺はそれに続く。
他の皆もついてくる。

「うーん、向こうかな？」

右にも、左にも、廃墟。

空は、薄く雲がかかっている。

「あれ？そこに人影…。行くよ、レナード！」

「あ、ちょっと！」

カノが走り出し、俺はそれを追いかける。

「逃げたよ！逃げた！追うよレナード！」

「お前は、どうしてそんなに、走れるんだよー！」

疲れる…。

「そこを左！次の角をインド人を右に！」

「わけわからん！」

どわー、もう嫌になってきた！

「そこだ！そこの建物！」

「了解！」

よっしゃ！包囲したぜ！

「それじゃあ、ゆっくり行くよ？」

「ああ」

なるべく音をたてないように、そろそろと歩く。
階段を上り、一人は階段に残り、もう一人が調べていく。

「最後の階だね」

「ああ」

「じゃあ行って来て」

「ほいほい」

抜き足、差し足、忍び足。

どこにいるんかね？ていうかなんで逃げる必要があるんだ？
と、どこかで何かが動く気配がする。

「あー、出てこい。もう逃げてもしょうがないぜ」

言いながら、俺はその気配に近づいていく。

そしてー

エピソード第二話（後書き）

テストで放置してました、サーセン
w

エピソード第三話

「カエ…デ？」

そして、そこにいたのは、見覚えようもない、カエデ。

「ん、久しぶりお兄ちゃん」

あ？喋ってる？

へ？なして？どうして喋ってるの？

「やっぱり会えた、どこかで繋がってんのかな」

「なん…で、カエデがいるんだ？どうして喋ってるんだ？」

何がどうなってる？

全く分らない。

目の前の、こいつは実は偽物じゃないだろうか。
真偽を確かめようとして…

『
』

何だ…？どうして心が読めない？

「お兄ちゃん、聞いて。私はね、帰ってきたの」

「どうして…だよ？」

「お兄ちゃんに会うため。ずっと好きだったから」

意味が分からない。彼女は、自分の好きなようにこの世界に出入りできるのか？

そんなはずは…

「大変、だったよ。私の能力のせいだ」

話が読めない。なんかもうわけがわからん。

「あの転送システムにはすごい魔力があった。お兄ちゃんと、お姉ちゃんの力もあったから」

多分、お姉ちゃんってのはカノのことだな。

「だけど、ちょうど能力が強化されていたから、元の世界までは帰れなかった。代わりに私がついたのは意味の分からない街。あの転送システムは、未完成だった。私にとっては、だけど」

「それで…その街でどうしたんだ？何があった？」

「うん、とにかく戻ろうと思ったの。お兄ちゃんのところ。そう思ったら、何か悲しくなってきたの。もう二度と私はお兄ちゃんに会えないんじゃないかって。そこに一人、おばあさんが通りかかったの」

「おばあさん？」

「うん。スカートをはいていたんだけど、私を見るなりスカートの中から水晶玉を取り出したの。そして私に『レナードのために全てを捨てられるか？』って言ったの。私は、はい、って答えた」

「ちょっと待てよ。俺のために、もとの世界の家族も、友人も、全て捨てるっていうのかよ！」

「だって、全てを捨てるって言った。私は私じゃないもの。元の世界のこともなんかなんにも覚えてない。だから、苦しくなんかないよ」

「……」

それは、正解なのか？

それで良いのか？カエデは幸せになったのだろうか？

「そして、」

エピソード第三話（後書き）

急展開の多いこの小説。許してW

このサイトリニューアルするんだとさW楽しみ

エピソード第四話

「ねえ、これで良かったのかな」

歩きながら、隣にいるカノは俺に尋ねた。

「さあ、ね。でも、カエデが望んだことだから…」

俺は、カエデをおぶって歩いていた。

あのあと、カエデは疲れたのか俺におんぶするように言ってきて、そのまま寝てしまったのだ。

『そして、私は新しくなったの。だから、今までのことは関係ない』

そう言ったカエデは、少し悲しそうな目をしていた様な気がする。
正解、では無いと思う。

でも、それは勝手に俺が思っていること。

カエデにとっては、これが正解なのだろう。

「ん…お兄ちゃん」

「どうした？」

「降りる」

「…そうか」

俺はしゃがんで、カエデを降ろす。

背中が楽になったけど、その分少し涼しくって寂しかった。

「ねえ、どこに行くの？」

カエデは尋ねる。

「さあ？多分、目的地なんて決まっていんじゃないか」

「そうだろうねえ」

カノも同意見らしい。

「まあいいや。お兄ちゃんと一緒なら」

「そっか」

ただ、今回の旅は『見つける』旅ではない。

『逃げる』旅なのだ。

これから、どうなるのだろうか。

何を見つけ、誰と戦うのだろうか。

そんなことを考えて、でも。

隣にいる、笑顔のカエデを見るとどうしても良くなってしまった。

きっとこの旅に、終わりなんて無いのだろう。

だったら、先のことなんて考えた方が無駄なのではないだろうか。

「おい、レナ！置いてくぞー！」

父さんが遅れている俺に声をかけた。

「だからあ！レナじゃないっつうの！」

エピソード第四話（後書き）

皆さん：終わりました！えーw

この終わりは：打ち切られたアニメの感じだよ！

いや、気にするな俺は気にしない。

：と、いうことで。

最後まで読んで下さった読者の方々。

本当にありがとうございました！

もしかしたら、続きを書くかもしれません。

だって、こんなんで終わるのもどうかと思うんだ（おい

それまでは、俺がこれから書くであろう、告白は激闘だ。の続編を
読んでください。

こちらは、もっぱらコメディです。多分。

それでは、また会う日まで！

全然更新できなくてすんませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4761g/>

瞳を見れば

2010年10月16日00時21分発行